沖縄県の乳がん検診とピンクリボン月間

沖縄赤十字病院　外科　時澤　博美

ピンクリボンは、乳がんの正しい知識を広め、乳がん検診の早期受診を推進することを目的とした、世界規模の啓発キャンペーンです。他のがんでもシンボルリボンと啓発月間が設定され、世界中でさまざまな啓発活動が行われています。以下に主ながんのシンボルリボンと啓発月間を紹介します。

1月：子宮頸がん（ティール＆ホワイト）2月：胆道がん（ケリーグリーン）3月：大腸がん（ダークブルー）・腎がん（オレンジ）4月：頭頸部がん（バーガンディー＆アイボリー）・脳腫瘍（グレー）5月：皮膚がん（ブラック）7月：骨・軟部腫瘍（イエロー）9月：前立腺がん（ライトブルー）、子宮体がん（ピーチ）、卵巣がん（ティール）、小児がん（ゴールド）、白血病（オレンジ）10月：乳がん（ピンク）・肝がん（エメラルドグリーン）11月：胃がん（ペリウィンクル）・肺がん（パール）・膵がん（パープル）

ピンクリボン月間は毎年10月に行われます。特に、10月1日は「ピンクリボンデー」として、東京タワーやレインボーブリッジなど、日本全国で乳がんに関する正しい知識と早期発見の重要性を呼びかけるためにピンク色にライトアップされるなど、多くの啓発キャンペーンが展開されます。

近年、日本の女性における乳がんの罹患数は上位に位置し、検診を推奨するがんの一つとなっています。乳がんによる死亡を減少させるには、早期発見が不可欠です。

沖縄県でも、乳がんの早期発見と治療の重要性がますます認識されています。平成29年度の沖縄県がん登録事業によると、乳がんの発見経緯のうち、がん検診・健康診断・人間ドックによるものが28.4%を占め、他のがんと比較しても検診による発見が多くなっています。

乳がんは早期発見で治癒率が高いがんです。しこりの大きさが2cm以内で、リンパ節や他の部位への転移がない場合、9割の患者が治癒します。欧米では検診受診率の向上により死亡率が減少していますが、日本では増加傾向にあります。

がん検診はブレスト・アウェアネスを高め、女性の健康への意識を高めるための重要な手段です。しかし、日本の乳がん検診受診率は他の先進国に比べて低い水準です。OECD（経済協力開発機構）加盟諸国の受診率が70～80%に対し、日本は30～40%程度です。2019年の国民生活基礎調査によれば、乳がん検診の受診率は全国平均で47.4%、沖縄県では48.3%（全国22位）でした。ただし、離島が多いためもあり、沖縄での精査受診率は全国平均よりもやや低い傾向にあります。

現在、日本では9人に1人が乳がんに罹患するともいわれています。30代後半より徐々にリスクが高くなっていき、40代から50代前半にピークとなり、閉経後に再びピークがあります。

自治体による対策型マンモグラフィ検診は40歳以上が対象となっています。40歳未満にはマンモグラフィ検診の有効性が認められていません。40歳未満では乳腺が発達しており、乳腺の異常がマンモグラフィでは分かりにくいためです。1,000人がマンモグラフィ検診を受けると、約50人から100人が要精査となり、実際に乳がんと診断されるのは約3人です。要精査となっても乳がんと診断される確率は低く、過度に心配する必要はありません。多くの方に乳がん検診を受けていただきたいと願っています。